

報 告

臨地実習におけるカンファレンスの実態

—教員のカンファレンス実施記録の分析を通して—

和泉 明子^{1*}, 大沢たか子², 矢野 智恵³, 伊藤 光代⁴, 三浦かず子⁵
今村 優子⁶, 高藤 裕子⁷, 吉田亜紀子⁸, 谷 愛⁹, 中井 寿雄¹⁰, 山崎江里子¹¹

要約: 本研究では、看護学科2年次の4領域の臨地実習におけるカンファレンスの実態を明らかにし、今後の教育実践への方向性を見出すことを目的とし調査を行った。その結果、カンファレンスの目的では、カンファレンス168回のうち「お互いの情報を伝達する」が73回(43.5%)、「内容を検討し考えを深める」が48回(28.6%)であった。記述された内容を分析した結果、「カンファレンスを実施するための環境調整の困難さ」「効果的なカンファレンス運営のための教員自身の課題」「カンファレンスの運営に影響している学生の特徴」「カンファレンスの効果としての学生の成長」「カンファレンスの効果としての教員自身の変化」が明らかとなった。このことから、①実習前に学生にカンファレンスの目的や方法を伝えるなどの準備が必要であること、②学生の特徴を考慮し、教員がファシリテーターとしての役割を担うなどの関わりが必要であり、そのために、教員のファシリテーター力の向上が求められることなどが示唆された。

キーワード: 看護基礎教育, 臨地実習, カンファレンス

はじめに

臨地実習においてカンファレンスは、学生が自らの行動を振り返り、対象となる人の理解や必要な看護について考えを深める機会となる。また、実習での不安の表出の場として活用されたり、それに学生同士が共感し合うなどのグループ作りの場としても重要であり、古くから用いられている教育方法である。

教員は、学生にとってより効果的なカンファレンスを目指し、指導したいと考えているが、実習中は時間や場所の制約もあり充実感のあるものにならないことも多い。

また、本学では、学生数が1学年70名前後であり、臨地実習の場も多いために、カンファレンスを通しての学びの質にばらつきがあるという課題もある。

加えて、本学看護学科の学生の看護実践能力習得の課題に関する報告¹⁾において、『コミュニケーション技術の未熟』『論理的思考の未確立』などが課題として挙げられており、教員もカンファレンス運営の困難さを感じていた。

既存の研究では、カンファレンスの効果やその内容をテーマにしたものはあるが、教員の指導方法に焦点を当てた研究は、看護系教育機関の現状

^{1*} 高知学園短期大学 看護学科 Email: aizumi@kochi-gc.ac.jp

^{2~11} 高知学園短期大学 看護学科

報告にとどまったものが多かった。そこで、本研究では、臨地実習のカンファレンスの内容や実施に際しての困難さなどの実態を把握し、カンファレンスを効果的なものにするための指導方法についての手掛かりを得ることを目的とした。

用語の定義：看護学科臨地実習におけるカンファレンスとは、日々の病棟での実習終了後に実習グループメンバー及び実習指導教員が実施するカンファレンス、実習期間の中間及び最終に実習施設の指導者（師長、主任、臨地実習指導者等）、学生、教員が実施するカンファレンスである。

研究方法

1. 対象者

本学看護学科の臨地実習においてカンファレンスに携わった教員13名を対象とした。

2. 調査内容

2年次の臨地実習「基礎看護実習」「成人看護実習（急性期看護・慢性期看護）」「母性看護実習」において行われたカンファレンスの実施記録を調査対象とした。

実施記録の内容は、1. カンファレンスの目的（選択肢）、2. カンファレンスにおける困難さ（自由記載）、3. カンファレンスの効果としての学生の成長（自由記載）、4. カンファレンスの効果としての教員自身の変化（自由記載）であり、研究者が作成した。

カンファレンスの目的として調査をした内容は、「困ったことを出し合う」、「お互いの情報を伝達共有する」、「内容を検討し考えを深める」、「感情を表出する」、「看護過程の展開を進める」、「学生を評価する」、「その他」の7項目である。複数回答可とし、168回の回答数の中で7項目それぞれについてチェックがあったものとチェックのなかったものをカウントし、項目別に割合を見た。

3. 研究期間

平成24年4月～平成24年9月。

4. 分析方法

実施記録の内容のうち、1. カンファレンスの目的については全体の中の各項目の占める割合を出した。2. カンファレンスにおける困難さ（自由記載）、3. カンファレンスの効果としての学生の成長（自由記載）、4. カンファレンスの効果としての教員自身の変化（自由記載）については、カンファレンスの実態を表す言葉をコード化し、類似した内容をまとめ、カテゴリーに名前をつけた。

5. 倫理的な配慮

実施記録の本研究への利用については、対象者に口頭及び文書で説明し、同意を得た。分析段階で、実施記録から個人や実習施設が特定されないよう努め、研究結果を公表する際にも個人や実習施設が特定されないよう配慮した。実施記録は施錠できる場所にて保管した。また、本研究は、平成24年度高知学園短期大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。（承認番号第19号 平成24年4月24日）

結 果

提出されたカンファレンス実施記録は、カンファレンス168回分（基礎看護実習49回、急性期看護実習42回、慢性期看護実習29回、母性看護実習48回）であった。

本研究において、カテゴリーは【 】、サブカテゴリーは< >、ローデータは< >で示す。

1. カンファレンスの目的（図1）

カンファレンスの目的で一番割合の高かった項目は「お互いの情報を伝達共有する」で73回（43.5%）、続いて「内容を検討し考えを深める」が48回（28.6%）、「看護過程の展開を進める」が45回（26.8%）、「困ったことを出しあう」が29回（17.3%）、「感情を表出する」が28回（16.7%）、「学生を評価する」が13回（7.7%）で、その他は42回（25.0%）であった。

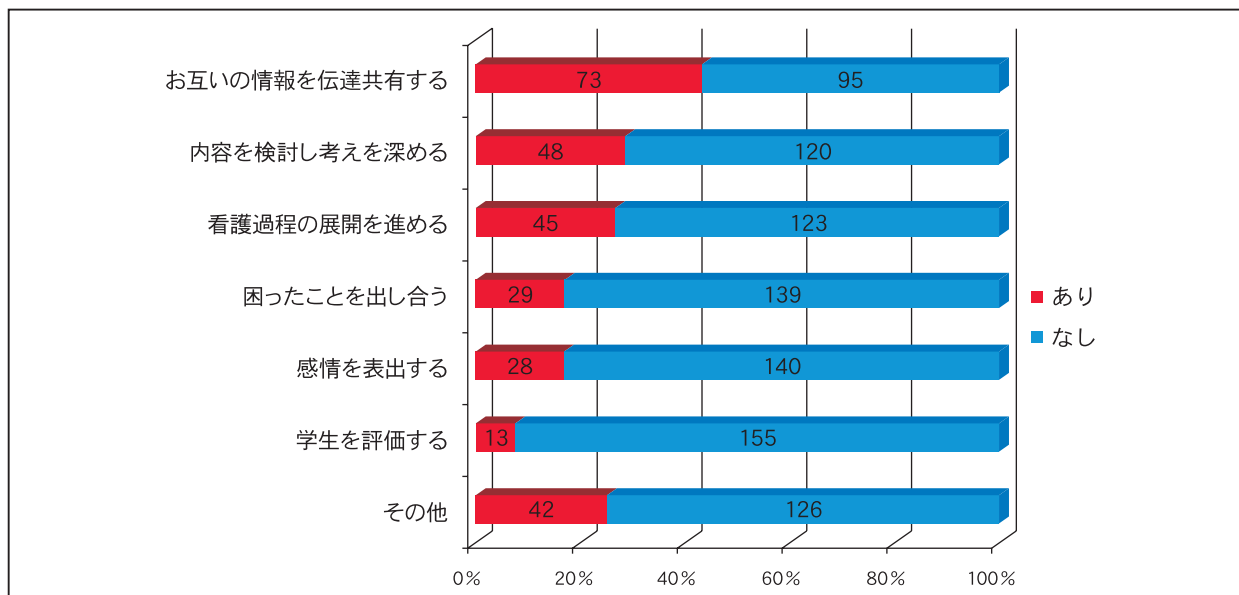


図1. カンファレンスの目的 (n=168)

2. カンファレンスを実施するための環境調整の困難さ (表1)

「カンファレンスを実施するための環境調整の困難さ」とは、学生数が多い中での場所の確保の問題や、受け持ち患者の個別のスケジュールに従った学生の動きの時間調整の問題を表しており、【場所の確保の困難さ】、【時間の確保の困難さ】、【グループ人数の多さ】、【領域の特徴上の困難さ】の4つのカテゴリーが抽出された。

3. 効果的なカンファレンス運営のための教員自身の課題 (表2)

「効果的なカンファレンス運営のための教員自身の課題」とは、カンファレンスの運営に対する自己の振り返りの中から現れてきた課題のとらえであり、【効果的な運営・指導の困難さ】、【教員の余裕のなさ】の2つのカテゴリーが抽出された。

表1. カンファレンスを実施するための環境調整の困難さ

カテゴリー	サブカテゴリー
場所の確保の困難さ	カンファレンスの場所の確保が難しい
時間の確保の困難さ	学生の学習能力・実践力が未熟であり指導に時間がかかる 効果的なカンファレンスをするための時間の確保が難しい
グループ人数の多さ	人数が多く、意見交換が不十分
領域の特徴上の困難さ	一領域中での実習場所が多様なためテーマの統一が難しい

表2. 効果的なカンファレンス運営のための教員自身の課題

カテゴリー	サブカテゴリー
効果的な運営・指導の困難さ	効果的な運営がされにくい
	ディスカッションを活発にする工夫がない
	教員と学生が目的を共有できていない
	まとめたり誘導しようとしてしまう
	ほめ方のむずかしさ
	カンファレンスの実施が形骸化している
教員の余裕のなさ	教員に時間的・体力的・精神的な余裕がない

表3. カンファレンスの運営に影響している学生の特徴

カテゴリー	サブカテゴリー
基礎知識の不足	病態の学習をする必要がある
	専門用語の使用が不十分である
	学生の知識不足
	テーマに関する知識が不足している
	知識不足で学生が自分の意見を言えない
ディスカッションするための材料の少なさ	受け持ち患者に関する情報がとれていない
カンファレンスを進める力の不足	カンファレンスの目的や必要性、運営の方法などが理解できていない
	カンファレンスの練習が不足している
	司会や書記の技術のなさ
参加度の低さ	教員に依存的である
	カンファレンスの参加に消極的である
内容の深まりや拡がりのなさ	深く思考することができず話が深まらない
	1人の学生の学びの共有ができにくい
	反省会のような内容で終わってしまう
理解力の不十分さ	指導者のアドバイスが理解できない
テーマ設定の困難さ	自分たちでテーマが決められない
	テーマの選択に迷う
	受け持ち患者に関するテーマが出されない
疲れや硬さ	緊張した雰囲気
	実習の疲労

4. カンファレンスの運営に影響している学生の特徴 (表3)

「カンファレンスの運営に影響している学生の特徴」とは、カンファレンスの運営に影響している学生の資質や姿勢に対する教員のとらえであり、【基礎知識の不足】、【ディスカッションするための材料の少なさ】、【カンファレンスを進める力の不足】、【参加度の低さ】、【内容の深まりや拡がりのなさ】、【理解力の不十分さ】、【テーマ設定の困難さ】、【疲れや硬さ】の8つのカテゴリーが抽出された。

5. カンファレンスの効果としての学生の成長 (表4)

「カンファレンスの効果としての学生の成長」とは、カンファレンスの実施を通しての学生の知識の深まり、視点の拡がり、内面的な成長へのとらえであり、【知識や学びが深まった】、【カンファレンスにおける役割をはたす力がついた】、【カンファレンスの意味を理解できた】、【ディスカッ

ションする力がついた】、【思考し、言語化する力がついた】、【自信を持って学びを看護ケアに繋げられるようになった】、【自分と異なる意見・新たな視点があることに気づいた】、【情緒的な成長がみられた】の8つのカテゴリーが抽出された。

6. カンファレンスの効果としての教員自身の変化 (表5)

「カンファレンスの効果としての教員自身の変化」とは、カンファレンスの実施を通して気づいた運営の技術や効果的な指導方法、学生と関わる喜びなどであり、【学生の考えや発言を待つことができるようになった】、【効果的な指導に繋がれるようになった】、【学生自身の課題が確認できた】、【学生の力、成長に気づくことができた】、【指導者からのフィードバックの効果に気づくことができた】、【学生の学びが病棟にフィードバックされることに気づいた】、【学生と関わることで喜びを感じるようになった】の7つのカテゴリーが抽出された。

表4. カンファレンスの効果としての学生の成長

カテゴリー	サブカテゴリー
知識や学びが深まった	意見交換の結果を看護過程の展開に活かすことができるようになった
	国家試験に向けて知識や学びの共有ができた
	学びが深まった
カンファレンスにおける役割をはたす力がついた	カンファレンスでの役割を遂行できるようになった
カンファレンスの意味を理解できた	カンファレンスの目的、積極的参加の意味を理解できた
ディスカッションする力がついた	他の学生に質問や同意ができるようになった
	人の意見を聞いて、自分の意見が言えるようになった
	意見交換ができるようになった
思考し、言語化する力がついた	自分の考えを他者に伝える力が身についた
	意思表示し、言語化できるようになった
	困りごとを相談できるようになった
自信を持って学びを看護ケアに繋げられるようになった	看護ケアの自信につながった
	意見交換の結果を看護実践に繋げられるようになった
自分と異なる意見・新たな視点があることに気づいた	異なる意見があることに気づいた
	新たな視点に気づいた
情緒的な成長がみられた	困っているのが自分だけではないことに気づいた
	人の立場で考えることができた
	自分や周囲の人を肯定的に捉えることができた
	共感の姿勢が取れた
	熱心な指導に感動した
	お互いの情報交換が自信につながった
	発表の機会が自信になった
	自分自身の振り返りができた

表5. カンファレンスの効果としての教員自身の変化

カテゴリー	サブカテゴリー
学生の考えや発言を待つことができるようになった	見守ることができるようになった
	考える時間を与え待つことで学生からいろいろな意見が出てくることを知った
	つい口をはさみたくなるが学生に任せて見守ることができた
効果的な指導に繋げられるようになった	グループダイナミックスをつかみやすくなった
	個人指導とグループ指導を効率的に組み合わせ指導できるようになった
	手厚い指導が必要な部分に関わることができた
学生自身の課題が確認できた	学生の学習不足が確認できた
	学生の課題など理解が進んだ
学生の力、成長に気づくことができた	学生の中に問題と向き合う力があることが分かった
	学生の気づきが翌日の看護実践に繋がっていることに気づいた
指導者からのフィードバックの効果に気づくことができた	指導者のアドバイスは学生に届くと感じた
	スタッフのアドバイスから教員の目の届かない部分を強化できた
	指導者のアドバイスから不足した情報や思考が補充された
学生の学びが病棟にフィードバックされることに気づいた	学生のとった情報などが現場の看護実践に反映された
学生と関わることで喜びを感じるようになった	学び合う場に立ち会う喜びを感じた
	学生の前向きな発言が励みになった

考 察

本研究の結果より、本学の臨地実習におけるカンファレンスでの困難さや、カンファレンスの効果が明らかとなった。そこで、今後の教育実践に活用するために、得られた結果を分析し、その特徴について述べる。

1. カンファレンスの目的の特徴

カンファレンスの目的について集計した結果、一番割合の高かった項目は「お互いの情報を伝達共有する」の73回(43.5%)という結果であった。

厚生労働省の「看護教育の内容と方法に関する検討報告書」²⁾では、看護師教育の現状と課題の中で「臨地実習では、(中略)患者層の変化や患者の権利擁護のためなどにより、従来の対象別・場所別の枠組で実習を効果的に行うことが困難になってきており、目的に合った学習体験の機会が確保できにくくなっている。」と臨地実習での学びの困難さが報告されている。本学においても受け持ち患者の特徴によって学習内容が異なるため、一人の学生が体験した現象を、他の学生に伝達し学びを共有することは必要なことだと考える。

イメージすることが難しい現代の学生には、体験ほど有効な学びにはならないかもしれないが、体験を聴くことで興味を持ち自己学習につながることや、印象深く心に残ることも期待できる。また、体験を伝える側の学生も、わかりやすく人に伝える訓練となり、発表の内容によっては集団からの良い評価を受ける体験ができる。今後も意識してカンファレンスの目的として取り上げていく必要があると考える。

一方「困ったことを出し合う」の項目は、29回(17.3%)という結果であった。奥ら³⁾の研究でも、臨地実習における看護学生が捉えた困難状況として、「目的到達の至難性/自尊心への脅かし/努力過程の不認知/悩みの重複/居場所の未定」などの困難さが明らかにされていたように、本学看護学科の2年生は、初めての实習であり、病態の理解や受け持ち患者及び看護師との関係性

の構築、看護過程の展開など、多くの困難があるものと予測される。しかし、カンファレンスの目的で学生の困りごとを扱う機会は少なかった。受け持ち患者から強く拒否されたり看護師に厳しく指導されたりすれば“困った”と思うのかもしれないが、そのような場面がなければ、自分が困った状況にいることすら気づかないことがある。

また、本研究の結果の「カンファレンスの効果としての学生の成長」の中に「困りごとを相談できるようになった」とあるように、実は困っていることを自覚することができていても、うまく言語化ができなかったり、相談する勇気がなかったりすることが考えられる。杉山⁴⁾は、学生の特徴を「自分の内面に思いをため込みやすい」と捉えてタイプを3つに分け、いずれもこちらから引き出していかなければその思いを表出することが難しいことを述べている。

困りごとを個別に相談することが必要な場合もあるが、本研究結果にカンファレンスの効果として「困っているのが自分だけではないことに気づいた」とあるように、困りごとをカンファレンスという場で扱うことは、集団の中で、他者の言動から自分を見つめなおし気づきをもたらすという効果が期待できる。これはヤーロム⁵⁾が集団精神療法で治療的因子として指摘している「普遍性」と一致する。同じ体験をしている者同士の集団の中では、単なる困りごと共感的に理解し合うことができる。よって、「困ったことを出し合う」という項目は、カンファレンスの目的として積極的に取り扱っていくことが望ましいと言える。

2. カンファレンス運営の困難さの特徴

室屋ら⁶⁾の研究では、看護師は、カンファレンスに影響する要因の一つとして「テーマ」を挙げており、「関心のあるテーマだと活発に意見が出る」「テーマが絞れないと話がまとまらない」などの意見があるように、「テーマ」の選定は重要だと言える。本研究の結果からも、カンファレンスの運営に影響している学生の特徴として【テーマ設定の困難さ】が挙げられていた。学生に自主

性や主体性を学ばせたいと考える教員は、学生自身にテーマを決定させたいと考えているが、それは難しいという現状が明らかとなった。

教員が、学生の特徴で【疲れや硬さ】を感じているように、学生たちは受け持ち患者や看護師の前で、緊張し、疲労している。自分のことで精一杯の学生に、集団で効果的なディスカッションができるテーマを選択することは非常に困難だと考えられる。

学生がテーマとして挙げたいものがあればそれを優先すればよいが、少ない時間の中で、テーマの選定に時間をかけるより、教員主体でテーマの提示をすることが効率的な場合もある。さらに、領域ごとに実習の到達目標に応じたテーマ設定があれば、カンファレンスの運営においてグループごとの学びのばらつきが減少するのではないかと考える。

本研究の結果には、カンファレンス運営の困難さの中に〈無口な人の割合が高いと、話をする人が限られてきてその人がイライラし始める〉との記述があった。これは、カンファレンスへの参加の仕方の問題ではあるが、話しやすい雰囲気がないために困難さを感じた例だと言える。

気心の知れたメンバー構成であれば、自由に話す雰囲気が生まれてくるものだが、カンファレンスを行う実習のグループメンバーの構成はそうではない場合も多い。特に、初めての实習に出る2年生は、実習グループが一緒になって初めて話をした学生もみられる。そのようなメンバーの中では、川島ら⁷⁾が述べるように、まず「誰かが発言を始めたなら、最後までしっかり聞くこと」が大切である。真面目に耳を傾け（傾聴）相手の意見を受け止める（受容）という姿勢は、看護師の基本となる態度であり、この態度が身につくよう指導するためにもカンファレンスの場が活用できる。聴く姿勢があれば、話しやすさは生まれてくるものと考えられる。

また、話しにくい内容であったり、意見の対立が起こるなどの話しにくい雰囲気が生じてきた場合は、運営を学生に任せず、教員の介入が必要で

あろう。それには、教員自身が、学生から信頼されていることや、話しやすい雰囲気を持っていること、そういった環境を生み出す力を持っていることなどが必要だと考えられる。

3. 学生の成長を促すカンファレンスの実践

本研究の結果から、カンファレンスの運営に影響している学生の特徴として【カンファレンスを進める力の不足】【参加度の低さ】が挙げられていた。臨地実習へ出る前の講義では、積極的にグループワークを取り入れ、学生は、ディスカッションも体験しているはずだが、主体的な参加には繋がっていないという結果であった。【基礎知識の不足】や【ディスカッションするための材料の少なさ】【内容の深まりや拡がりのなさ】【理解力の不十分さ】なども主体的に参加できない理由だと考えられる。

これらの学生の特徴は、前記した本学看護学科の学生の看護実践能力習得の課題につながる特徴と一致する。濱名⁸⁾は、高等学校教育課程実施状況調査などをもとに、現代の高校生のおくは「学習に取り組む姿勢や、学習に最低限必要なノートの取り方なども含めた学習スキルなどの“学び方”そのものを身につけていない」と高校教育の質の保証がされていないことを述べている。また、川田ら⁹⁾は、看護教員が学生の生活体験の乏しさを感じたものとして「他者に対する配慮や思いやりの乏しさ／コミュニケーション能力の乏しさ／生活技術の乏しさ／清潔不潔感の乏しさ」などを挙げている。そして中山¹⁰⁾は、学生について「看護職にとって最も重要なコミュニケーション能力が変わってきている。私たちの時代においては重要視され、看護職の特徴でもあった“察する”とか、“推測する”という能力は持ち合わせていないと考えたほうが良い育ち方をしている」と最近の看護学生の質の変化について述べている。つまり、知識の不十分さやコミュニケーション能力の低下と言った特徴は、本学の学生だけのものではないと言えるであろう。

教員は、自身の指導に学生を合わせることを考

えるのではなく、これが現代の看護学生が持つ特性として捉え、学生の特性に合わせた教授方法や指導方法を考慮しなければならない。カンファレンスに積極的に参加し、活発にディスカッションするためには、事前にカンファレンスの目的や必要性・運営の具体的方法を伝え、実際にそれらを意識しながら体験してみるなどの準備が必要であり、自ら考え、言語化し、他者に伝えるという訓練ができるようなカリキュラム上の工夫が必要だと考える。すでに具体的には、赤星ら¹¹⁾の事例を展開しロールプレイを行う方法や、太湯ら¹²⁾のSP(模擬患者)を利用した共感的コミュニケーション能力を高める試み、酒井¹³⁾の人間関係トレーニングを授業に取り入れ、実習でのカンファレンスの変化を見るものなどの報告がされている。

また、本研究の結果において、学生の成長として【カンファレンスにおける役割をはたす力がついた】【カンファレンスの意味を理解できた】【ディスカッションする力がついた】【思考し、言語化する力がついた】などが挙げられていたことから、学生がカンファレンスに主体的に参加できるようになってから実習に出るというよりも、実習での体験を通して、リアリティを持ったカンファレンスを実施していく中で、これらの力をつけていくことを目指すことが必要ではないかと考える。

本研究では、学生の特徴として「司会や書記の技術のなさ」も挙げられていた。しかし、教員も自分自身が会議の司会をすることを考えれば、その技術がいかに高度なものであるか分かる。そして学生のカンファレンスでは、積極的な参加が期待できなかったり、思考の拡がりや十分でないと言った状況があり、その中での司会となるとさらに難しさを増すであろう。川島ら¹⁴⁾は、司会者に求められることとして「①内容を深めるために筋道を立てた思考の展開ができること、②話しやすい雰囲気を作るために、参加者や集団の感情の動きに敏感で、配慮ができること」を挙げている。この期待に学生が応えるのは無理だと断定はできないが、最終的にこれらの能力を身につけていく

ためには、まずはマニュアル的にでも、順に学生の意見を求めていくことから始めなければならない。そしてその際教員は、ファシリテーターとしての役割を担う必要がある。渡辺¹⁵⁾は、ファシリテーターのスキルとして①共有②発散③収束④決定の4つを挙げている。つまり、情報を共有し、メンバーの意見をうまく引き出す。そして、出そろった意見を検討し、まとめてお互いの合意形成に導くというプロセスである。これはカンファレンス運営におけるファシリテーターの役割であり、教員はさらに、教育的に学生を導くことで、気づきを促し、体験と知識を結びつけていかなければならない。このことについて、廣田¹⁶⁾は、「講義や演習とは比較にならないほど高い教授能力を必要とする」と述べており、今後、教員が教授活動の質の向上に努めていかなければならないことが示唆された。

4. カンファレンスの運営を通じた教員自身の成長

本研究の結果、【学生の考えや発言を待つことができるようになった】【効果的な指導に繋がれるようになった】などのカテゴリーが得られており、カンファレンスの運営を通して教員自身も変化や成長がみられることがわかった。実習を担当する教員も、カンファレンスの運営には日々試行錯誤している。その中で、学生を見守ったり考える時間を与え待つことで効果的なカンファレンスの運営に繋がるといった気づきや学びが得られていたり、また、学生の中に問題と向き合う力があることがわかったと述べている。学生の力や成長に気づく力を高めていくことも必要であるため、このようなカンファレンスの運営の技についても今後さらに研究を行っていく必要があると考える。

教育実践への活用

教育実践への活用として以下のことが考えられた。

1. 実習前の学生の準備

実習前の準備として、カンファレンスの目的や実施する意味、運営の方法、司会やメンバーの役割、お互いに話しやすい雰囲気を作るためのルールなどを学生に伝えることが必要であると考えられる。さらに、模擬カンファレンスを行ってみるなどして、実際に学生に体験してもらい、振り返りを行うことも取り入れていけるかもしれない。

2. 学生の特徴を考慮したカンファレンスの運営

教員は、学生の特徴を考慮し、カンファレンスの運営を学生に任せてしまうのではなく、場に応じてテーマを提示したり、ファシリテーターとしての役割を担ったりしながら、今その場で学んでいけることを援助することも必要である。そのため、教員のカンファシリテーション力の向上についても考えていく必要がある。

おわりに

研究の結果より、本学の臨地実習でのカンファレンスにおける課題が明確となり、そこから今後の教育実践への活用の方角性を見出すことができた。

教員は、多くの課題を抱えながらも、カンファレンスを通して自分自身の変化や学生の成長も感じていた。このことから、臨地実習でのカンファレンスをより効果的に運営していくことを考えていきたい。

そのためには教員のプロフェッショナル・指導力の向上が求められる。しかし、多様な教授方法を学ぶ中で、特別な技術に取り組むのではなく、安酸¹⁷⁾が、経験型実習教育における授業過程モデルの中で、『教師は学生の直接的経験を把握し、明確化するために学生の行動や話を「よく見て、よく聴く」ことが求められる』と述べているように、今からでもできることから取り組んでいくことが大切だと考える。

研究の限界と課題

本研究のデータは、実習の期間中に教員が記述したものをまとめたものであり、カンファレンス

の実態について記述された内容は、抽象度の高いものが多く、今後どのような教授方法や指導方法が有効であるのかを具体的に考えるには至らなかった。

また、今回の研究では、教員を感じる困難さを中心に考察したが、カンファレンスを実際に体験している学生からの意見は反映されていない。これらは本研究の限界であり、今後、カンファレンス運営の工夫を進めながら、学生からのフィードバックを活かした指導に繋げていきたい。

引用文献

- 1) 山崎美恵子他, 看護基礎教育課程における学生の看護実践能力習得の課題に関する報告, *高知学園短期大学紀要*, **2011**, 41, 73-80.
- 2) 厚生労働省, 看護教育の内容と方法に関する検討報告書 www.mhlw.go.jp/stfoudou/...att/2r98520000013l4m.pdf
- 3) 奥百合子他, 臨地実習における看護学生が捉えた困難状況と困難への対処過程, *日本看護研究学会雑誌*, **2009**, 32 (3), 171.
- 4) 杉山恵子, 看護を目指す“若者”への効果的介入 今こそ必要な支援, *看護教育*, **2009**, MAY, 50 (5), 408-412.
- 5) Irvin D. Yalom, M. D. Sophia Vinogradov, M. D. *グループサイコセラピー*, **2001**, 東京, 金剛出版, 23-32.
- 6) 室屋和子他, 臨地実習における学生カンファレンスに対する看護師の認識, *J UOEH (産業医科大学雑誌)*, **2011**, 33 (1), 63-72.
- 7) 川島みどり, 杉野元子, *看護カンファレンス 第3版*, **2008**, 東京, 医学書院, 72.
- 8) 濱名篤, 学生が自ら学ぶようにするために高等教育における学習支援の必要性, *看護教育*, **2009**, JUL, 50 (7), 568-573.
- 9) 川田知美他, 看護教員が学生の生活体験の乏しさを感じた実習場面, *群馬保健学紀要*, **2005**, 26, 133-140.
- 10) 中山洋子, 看護学基盤教育のこれからの方向性, *日本看護学教育学会誌*, **2010**, 20 (2),

- 47-54.
- 11) 赤星成子他, 事例を用いた授業展開の試み—事例展開し、ロールプレイを行ったことによる学生の学び—, *日本看護研究学会雑誌*, **2003**, 26 (3), 399.
 - 12) 太湯好子他, SP (模擬患者) を利用した共感的コミュニケーション能力を高める看護教育の試み (第一報), *日本看護研究学会雑誌*, **2003**, 26 (3), 387.
 - 13) 酒井志保, 基礎看護実習におけるカンファレンスの変化—人間関係トレーニングを授業に取り入れて—, *日本看護研究学会雑誌*, **2003**, 26 (3), 287.
 - 14) 前掲書2) 80.
 - 15) 渡辺裕子, 元気が出るカンファレンスの進め方, *月間家族ケア*, **2010**, 8 (9), 1-11.
 - 16) 廣田登志子, 研究成果が示す看護学実習カンファレンスにおける教授活動の課題, *看護教育学研究*, **2002**, 11 (2), 16-17.
 - 17) 安酸史子, 学生とともにつくる臨地実習教育, *看護教育*, **2000**, 41 (10), 814-825.

Report

**The state of the conference in clinical practice
Through the analysis of the conference enforcement record of the teachers**

Akiko IZUMI^{1*}, Takako OSAWA², Chie YANO³, Teruyo ITO⁴, Kazuko MIURA⁵
Masako IMAMURA⁶, Yuko TAKATO⁷, Akiko YOSHIDA⁸, Megumi TANI⁹,
Hisao NAKAI¹⁰ and Eriko YAMASAKI¹¹

Abstract: In this study, we investigated the state of the conference at clinical practice in 4 areas in the sophomore of nursing students, which was intended to find the directionality of future educational practice. As a result, for the purpose of the conference, “sharing each other’s information” was 73 times(43.5%), “examining contents and deepened a thought” was 48 times (28.6%) in 168 times of the conference.

As a result of having analyzed described contents qualitatively, “difficulty of the environmental management for carrying out conference,” “a teacher’s subject own for effective conference management,” “affected characteristic of the students who run the conference,” “growth of the students as the effect of the conference,” and “change teachers themselves as the effect of the conference” have become clear.

From this, what was suggested it as follows:

1. Teachers need to prepare such as telling the students purpose and how to run the conference before clinical practice.
2. Teachers have to support as a role of the facilitators while thinking about the characteristic of the student. On that account, teachers are required to improve their ability as the facilitators.

Key Words: nursing basic education, clinical practice, conference

^{1*} Kochi Gakuen College, Department of Nursing, Email: aizumi@kochi-gc.ac.jp

^{2~11} Kochi Gakuen College, Department of Nursing

